



あの日、魔屋で
僕の身に起きた出来事

R18

ADULT ONLY

沼坂星作

これは僕が○学生の時
体験した話です。



当時ぼくが通っていた学校にはある噂がありました

近所にある廃アパートの一室に女の幽霊が現れる…と

そんなアパートにぼくはあの日友人とのゲームに負けた罰ゲームとして単身忍び込む事になったのです



早く撮って帰ろう…



部屋の鍵はかかっておらず、入ることは簡単でした

中は荒らされた様子はなくさっそくぼくは証拠の写真を撮る準備を始めました



それは突然現れました

ガクガク

ド
ド
ド

ド
ド
ド

そいつは
ゆっくりと姿を
あらわしました

体の大きさは
捕食者のそれであり
明らかに人では
ありません

その尋常ざらなる姿に
悲鳴すらあげる事が
出来ませんでした

ド
ド
ド

ド
ド
ド

恐怖、怖れ：
そんな感情が
ぼくを襲いました



しかし
そんな感情以上に
支配するものが
あったのです

異様な姿といえど
それは間違いなく女の体

初めて見る母親以外の裸に
ぼくは視線を離すことが
出来ませんでした

ぼくは
目の前に迫る
巨大な裸体に

股間を熱く
怒張らせていました
そう、欲情していたのです

ウウウ

ウキウキ？

グルグル

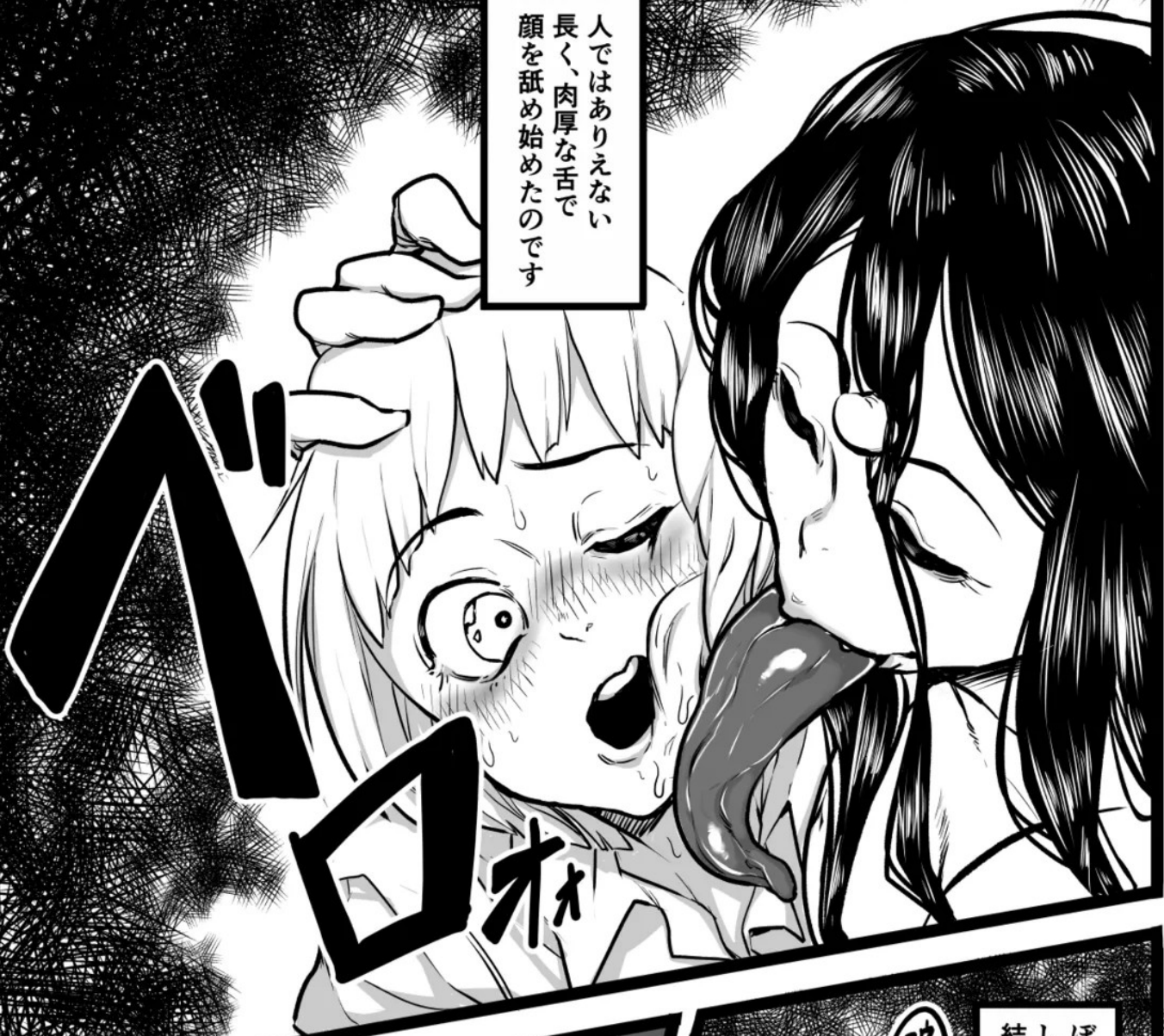
そいつは近寄り
ぼくの顔を凝視して
きました

そして
突然の事に、驚き
動けないぼくを...

アッ



人ではありえない
長く、肉厚な舌で
顔を舐め始めたのです



ぼくは必死に抵抗
しましたが
結局されるがままに



っっっっっ...



あろうことが
口の中に舌を
入れてきたのです

ぼくの
初めてのキスでした
はたして、それが「キス」と
言っているのあれば…

そうしてぼくは
口を塞がれた息苦しさ
その初めて感触に
頭がいっぱいになって
いきました

口オオオオ

口口口

口口

オ

オ

オ

オ

オオオ

!



苦しさと
恍惚のさなか
朦朧とした意識で

私は無意識に
何かに縋ろうと
手を伸ばしました

ア
ア

知
知

ア
ア



うあ？

ぼくは
目の前にある巨大な
乳房を揉みしだき
ました



怯んでる……？
そんな風に
見えたぼくは





この隙を逃しては
いけない、そう思い
乳首を力任せに
ひっぱりました



ぼくはその涙に
狼狽してしまい



思わず手を離して
しまいました
すると...





勢いよく
おっぱいから母乳が
吹き出したのです



飛び散った母乳の
濃厚で甘い匂いは
たちまち部屋に充滿して

白い液体の滴る
巨大なおっぱいを前に
ぼくの理性は効かなくなりました

ぼくは無我夢中でおっぱいにむしゃぶりつきました



そうやって
母乳の滴る大きな乳首を
回いっぱいに頬張って
勢いよく吸い続けていると...

ゴッ...

ゴッ
ゴッ

突然
そいつはぼくのことを
抱きしめてきたのです

ギョウウウウ

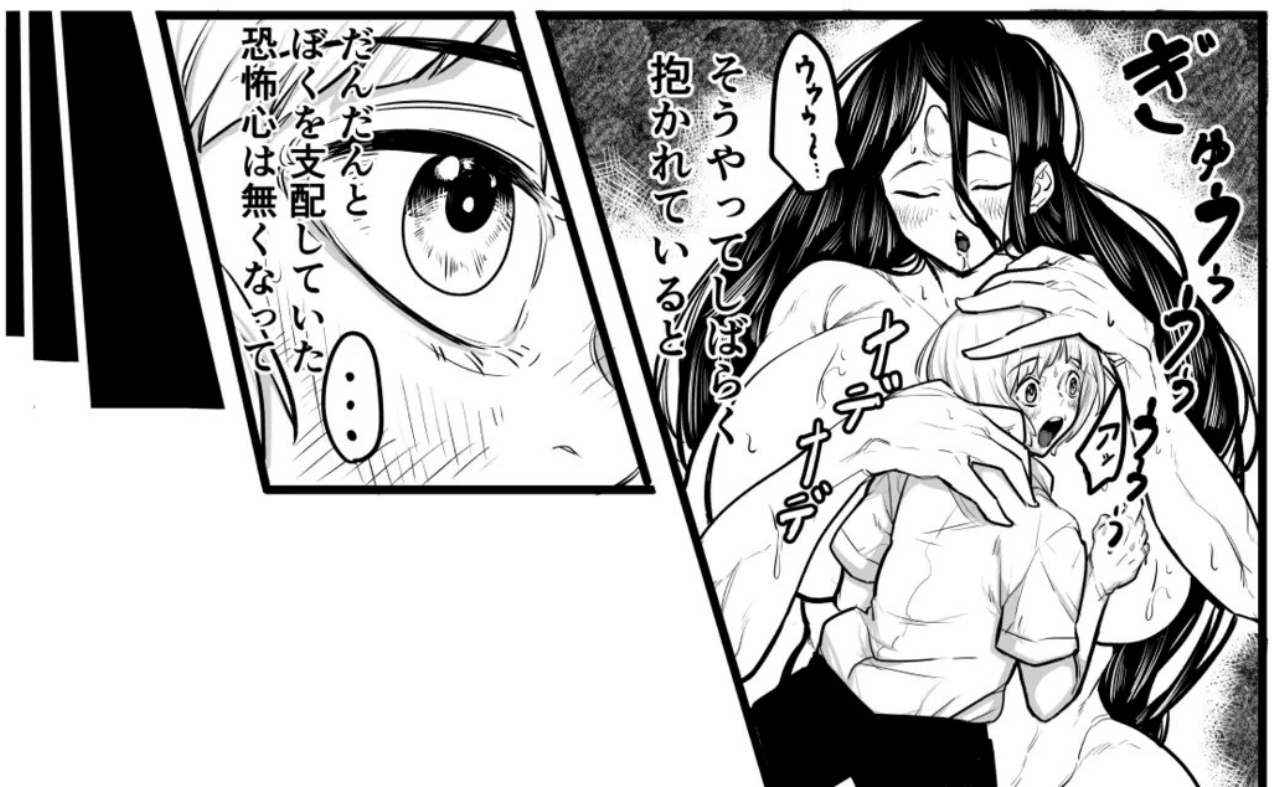


そこで敵意はなく
うしろやうしちのぼくを
キロキロ

ギョウウウウ

ウウウ...
そうやってしほく
抱かれていると

だんだんと
ぼくを支配していた
恐怖心は無くなつて



残った性欲の赴くままに
ぼくは目の前のやわらかい体を
貪りました



そんなぼくに
そいつはまるで
理想のお母さんが
子供を甘やかすみたい
に
全てを受け入れて
くれました



そこからぼくは
性欲の赴くまま
色々なことをしました



オキッ?

トリ...



グッポポポポ!

あっあひっ♡
ちんちん飲み込まれてる♡

ちんちん溶けて
なくなっちゃう♡

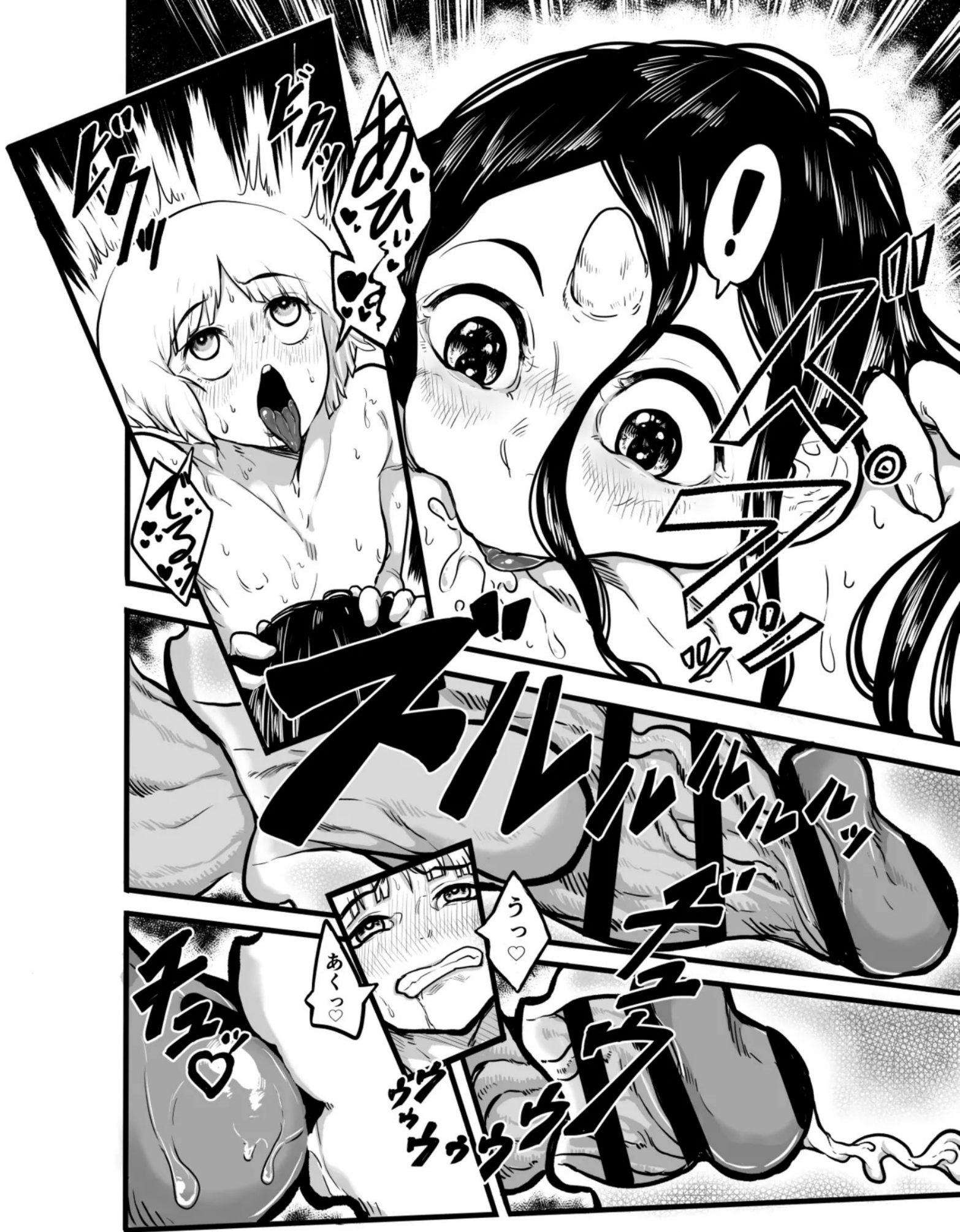
あっこれ
出ちゃう♡

お口に全部
出ちゃう♡

ちゅちゅ
ぐちゅ

はーゆるゆる

んんん♡



クッ
クッ
クッ

あひゃ
あひゃ
あひゃ

あひゃ
あひゃ
あひゃ

ズル
ズル
ズル
ズル
ズル

ズ

ズ
ズ
ズ

あくっ
あくっ

うっ
うっ

グ
グ
グ

グ
グ
グ





おん

ひびき

んおっ

ゴッゴッ

あん

あ

ゴッゴッ

あぁあ

あ
まっ
まっ
まって

ま、また
おちんちんが

また♡
全部入っちゃった♡

んひっ♡
これ、ダメっ♡

伸びちゃうっ♡
おちんちん伸びちゃうっ♡
のにきぼちいい♡

んひっ♡

んひっ♡

んひっ♡





ポッ♡
おっ♡

ドッ♡
クッ♡

おっ♡
クッ♡

ちろちろ♡
クッ♡



私ハ
ホ

ク
ク
ク

ク
オ

ク
ホ

あッ♡
ふ♡

クホ
ホ







おっぱい
おっぱい
おっぱい

おっぱい
おっぱい

ん...

おっぱい
おっぱい
おっぱい

おっぱい
おっぱい
おっぱい

おっぱい

おっぱい
おっぱい
おっぱい

やううう
ううう
ううう



んくっはあっっ♡
おいしい♡
おっばい全部飲むっ♡

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん



疲れて動けなく
なるまでエッチな
ことをしました

クチュクチュ
クチュクチュ

クチュクチュ
クチュクチュ



そのあとも
何度も何度も
射精して



こいつは
結局なんなん
だろう？



なんだか
すごいことを
してしまった...

それにも
しても...

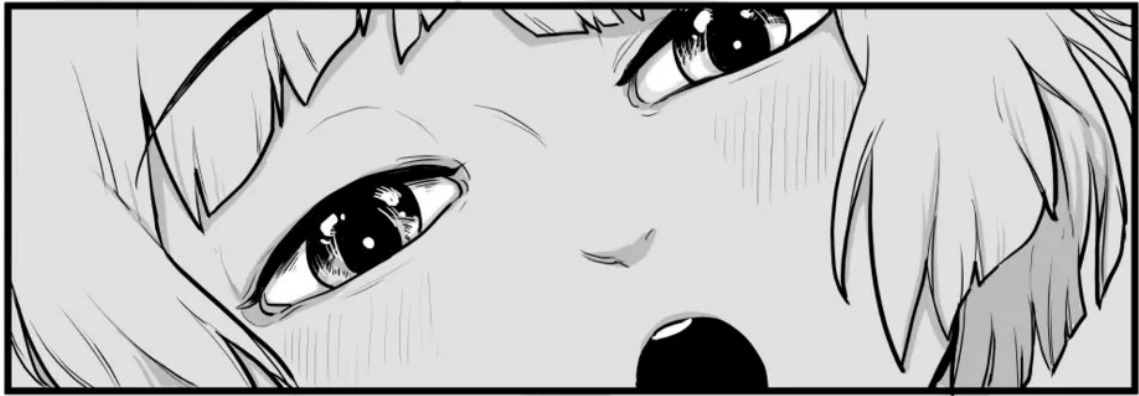


すごい
眠い...



まあいや
いまは







分かった
いま行くっ!

あとがき

ここまで読んでいただきありがとうございます。
沼坂星作といたします。

この作品は知り合いのAさんから聞いた怪談を元に作りました。
せっかくなので、その話をここに書いておこうかな、と思います。

Aさんは子供の頃、住んでいた古いアパートに一人でいると、
黒くて大きな人が現れたそうです。

何かAさんに危害を加えるということは無く、ただ部屋を
徘徊するだけだったそうですが、Aさんはそれが怖く、
視界に入らないようにしていたそうです。

Aさんは母子家庭で、母親は夜遅くまで働きに出ており、
このことを相談しようにも、帰宅して疲れ切った様子の母親には
話すことは出来なかったといたします。

しかし、その状況はやはり嫌で、外で遊んでいたそうなのですが、
その頃、世間では通り魔的な殺人事件が起きたばかりで、
母親からは部屋で遊ぶよう言われ、渋々黒い人が徘徊する部屋で
遊んでいたそうです。

そんなある日、Aさんが携帯ゲーム機で遊んでいると、
何故かあの黒い人が、いつもより自分の近くにいるように感じる。

最初は無視していたらしいのですが、気になって顔を上げると、
自分の鼻先で、手のひらほどの大きな目がAさんを見つめている。

それは女性の目で、自分に対して敵意のようなものを向けている、
そんな気がする。

「そういうことじゃ、ないんだけどね…」

そんな、少し嘲笑するような男の人の声が耳元で聞こえたと同時に、
目はパッと消えてしまったといたします。

その日以来、Aさんの母親は帰って来ず、今も行方不明なのだそうです。

その後Aさんは、親戚の家に身を寄せることになったらしいのですが、
以降、黒い人は見なくなったといたします。

以上がAさんから聞いた話です。

今回描いたマンガとは似ても似つかない内容ではあるのですが、
大きい人、古びたアパートの一室、という部分が非常に惹かれる
ものがあり、こんな内容になりました。

長々と書いてしまいましたが、

改めて読んでいただきありがとうございます。

またの機会があれば、その時は是非、よろしくお願いします。

沼坂星作

